

「運命を知ることができたなら」を視聴して

最近の医学、医療技術の進歩は目覚ましく、周産期医療でも妊娠20週台で生まれた超未熟児が生育することが報告（「雑学BN」のマスコミ等コメント関係（Ⅲ）、2007.02.22.「『超未熟児生育』報道と、『誕生日』番組に接して」：参照）されている。

こうした超未熟児でも保育器の中に入れれば命は取り留めるケースもあれば、先天的な、あるいは出産の際に受けた重い障害を負っていることも少なくないケースも少なからずあるよう。

時には積極的な治療の中止という決断を余儀なくされ、そこには医師たちの人としての苦悩が生じる。

オランダのある病院のNICU（新生児集中治療室）の医師たちのそうした苦悩を取り上げたドキュメンタリー番組「運命を知ることができたなら：前・後編」を視聴した。

この病院では、治療を中止する基準「フローニンゲン・プロトコル」を作成しているよう。

オランダでは、この基準に沿う医師たちの合議制による治療中止は、法的には自然死として扱われるよう。

だが、「この基準は世界各国から注目を集めた」が、障害や難病を負っても「生きる可能性を持った新生児の治療が正当な理由なしに打ち切られかねないという非難も巻き起こしてる」とか。

それだけに、オランダの放送局制作のこの番組は、一切のナレーションはなく、唯淡々とNICUでの医師たちの様子、治療方針や治療中止を話し合う医師たちの会話、そして、医師たち一人一人の人としての苦悩の呟き、また、治療方針や治療中止を受け止める家族の様子だけで構成され、正に「新生児集中治療室の日々」を映しただけの番組であり、医師たちのその新生児の予後である「運命を知ることができたなら」と苦悩する様子が浮かび上がってくる番組であった。

今後益々、ガン治療や高齢者医療の進歩による延命に伴い、我々自身が「生命とは何か」、「生きるとはどういうことか」が問われることにもなるだろうと思う。

その問いが、既にこうした新生児医療の現場では日々現実問題として医師たち一人一人は向き合っているようで、医師たちの苦悩は我々の苦悩を予感させるように思いつつ、視聴した。